

見出していけるようにかかわらねばならない仕事であるという点において、仏教看護は霊的側面の対応を重視している。

三 仏教看護であることの意味

では、なぜ新しい科学的看護の可能性を「仏教看護」に求めるのかといえば、その理由の一つは、日本の看護の歴史は仏教を抜きにしては語れないからである。少なくとも日本の看護は仏教の精神、すなわち慈悲の心を基として、病人や貧しい人々を世話することから始まっており、さらには時代を越えて看護と仏教の結びつきを期待した人たちがいたということである。

二つ目の理由は、より日本的な看護を追及したいという点にある。何故ならば、看護の在り方にも、その国の文化、宗教、国民性、歴史、風俗・習慣などが反映されるものであり、日本における看護には、日本および日本人の諸々の特質が反映されるものであるからである。もちろん、看護の対象は人間であり、看護の本質においては万国に共通する面も多くある。仏教看護では、そのことを認識したうえで、さらにわが国にふさわしい個性と独自性をもった看護を考えることをめざしている。

四 仏教看護の本質

仏教看護の本質を理論化し、具体的な方法論にまで言及したものが「仏教看護論」である。仏教看護では、仏教の教えや価値観を看護の基本的な考え方や実際に取り込んでおり、それは、看護の主体、対象の双方に対して意味をもつものであると考えている。また仏教看護では、看護する側、される側の生死観を大切にしている。生死観は霊的側面のニーズに大きく影響

するからである。

以上、述べてきたようなことから、仏教看護のめざしているものは宗教の社会貢献、とりわけ霊的側面の事がらにかかわっていける可能性を秘めているものと考ええる。

パネルの主旨とまとめ

戸田 游 晏

総論に代えて戸田は、寺族の一人として、日本仏教に向けられる眼差しへの問い返しを試みた。六甲山麓の生家寺院の暮しでは、民俗学に謂う「山の怪」と日常が交わり、朝夕のお勤めで天地国家から親族一同に至る安寧と幸福が祈念されていた。これらを、どのような枠組から語ればよいのか、そもそも語る術はないのか。三・一一を機に、日本の仏教をはじめ宗教そのものの、これを考究する立場にも、一層の変革が求められるだろう。歴史と集団の記憶に蓄えられた智慧に再び活力を与える余地があるのではないかと問うた。

日本の仏教者が歴史的に果たした主な職掌に、祈禱と死者供養そして医療がある。

東大寺修二会は、一二六〇年の間途絶えることなき不退の行法と謂われる、民と国土の安泰を祈願する儀礼であり、練行衆と呼ばれる僧侶らが身を献じ、諸々の修法が行ぜられる。平岡が本年、練行衆を司る大導師を務めていた修二会の期間中、東日本大震災が発災した。これにあたり急遽祈願のなかに、事態

に応じた文言が盛り込まれたという。今回の発表で平岡は、自身が一〇一〇年に咒師(神仏習合の様態を優れて留める作法を特徴とする)を務めた際の「天狗寄せ(大中臣祓)」の映像資料を提示し、解説した。

続いて坂井が、田辺元の「死者との実存協同」の思想に基づき、死者が生者を「供養」とするという転回を通して、死者供養の意義を論考するための新たな着眼点を提示した。

藤腹からは、仏道に基づく日本的医療支援である、「仏教看護」の概要が紹介された。

小川有閑氏から、戸田の意図は、「祈禱や死者供養を『社会貢献』と認めさせようとの趣旨か」との問いを受け、近代教育を身につけ社会が要請する貢献の意義も認める寺族の立場から、個の体験と公共の実践との二重標準に生きるべく強いられる葛藤を例示したもので、現行「社会貢献」概念への同化を目指そうとするものではない、と明確にし得た。

櫻井治男氏から平岡に、大中臣祓は神道で唱えられる祝詞とは異なるものかとの質問があり、同じであるが、黙読を以て唱えられることと回答した。

坂井は、小川氏からの死者を導く「仏の世界」とはどのような状態を想定しているのかとの問いに、仏の世界とは一つの象徴的表現であるが、日常の人間の状況を形作る、自我的・主体的・能動的な意識を転換して、受動的・無我的な意識、謂わば生かされて生きているという生のあり方に目覚めることを問題にしたいとの意味を込めている、と応じた。

また、渡辺順一氏から、金光教と仏式の葬儀の比較を例に、

僧侶には、死者を通して生者に目覚めを促すのみならず、生前の生き方に現れる死者からの声を伝える役割があるのではないかと、との問いかけがあった。坂井はこれを、死者を語ることが抽象的な教義の中に死者を回収してしまうことへの危惧と受けとめ、死者の問題が葬儀や法要に限らず、寺院というコミュニケーションの問題に深く繋がることを改めて知らされた思いがした、という。

死者の生前の様子を遺族から聴き取って作成される金光教の葬儀の祝詞を、死者から生者への語りかけと考えれば、死者が遺族に遺した言葉というより、まさにそのように遺族に語らせるホトケがそこに存すると受けとめるべきかもしれない、と實川はコメントした。

藤腹は、A. Sevilla氏からの問いに応じ、終末期医療現場での様々な苦しみに対しての看護者の関わりとケアについて、改めて具体的に説明した。

最後に杉岡信行氏から、「社会貢献」の語には、顔の見えない相手との関係が主に想起されるのだが、人と人が身近に接する関係こそが真に重要ではないか、と感想を戴いた。

嵐の名残の悪天候の中、ご参会の方々登壇者共に、遠方から交通の困難にも関わらずご来駕を賜りました。末尾になりましたが、この文面を借り心からの御礼を申し上げます。